

日本語版への序文

日本は核兵器と特別な関係を持っている国である。世界中のほとんどの人々は、核兵器というものを、日本人の目を通して見ていると言っても良い。人々は、日本の被爆者が語ってきた言葉を通して核戦争の恐ろしさを理解している。人々が心に思い描いている核戦争のイメージも、ヒロシマ、ナガサキの写真から得られたものであろう。日本こそが目撃者なのであり、世界は核兵器に関する真実について、日本に依存している。

しかし、それにもかかわらず、核兵器に関する真実は多くの課題に直面している。世界中の核兵器に関する考えのほとんどは、著しい恐怖の時代であった冷戦の間に形作られたものである。恐れにとらわれている人々は、十分に頭が働かないものである。恐怖は人々の判断を狂わせ、結論を歪ませる。冷戦の考えは、核兵器に関する真実への到達を困難にしてしまったのである。

核兵器は多くの国の政府にとって重要である。核兵器は威信とパワーの象徴である。ある人々にとっては、核兵器は誇りの根源である。不拡散の専門家は、自分たちの祖国が重要な国であると認めて欲しいがために核兵器を造った国もあると言っている。愛国的な誇りと、パワーへの渴望が、核兵器に関する真実への到達を困難にしている。

核抑止という概念が、日本とアメリカとの間の安全保障条約を含む、多くの条約の根幹に据えられている。NATO（北大西洋条約機構）は、ヨーロッパを防衛するために核兵器を使用するという約束の上に作られた組織である。NATOは、自国の安全の維持を核抑止に依存する国家のグループなのである。NATO 各国の安心感と将来への希望は、核兵器に依存している。あまりにも多くのものが核兵器の双肩にのせられているために、各国の政府が、時に核兵器の利点を誇張し、また時に核兵器の危険性を控えめに見積もることはことさらに驚くべきことではないだろう。私たちが核兵器に依存する大きさが、核兵器に関する真実への到達を困難にしている。

恐怖、誇り、そして依存のすべてが、核兵器に関する真実への到達を困難にしている。しかし、真実へ至る道を切り拓いていくことが絶対に必要である。核兵器というものは、恐ろしく危険なものである。核兵器は、文明の大部分を一瞬にして破壊する可能性を表している。あまりにも多くのものがそこに懸かっているために、思慮ある人間として、私たちは現実的でなければならない。私たちは、耳触りの良い話や神話による気休めに決して身を委ねてはならない。真実から目を背けることは、私たちの希望、夢、そして私たち自身にとって災いとなる。また、それは、これから成長し、自分の人生の可能性を活かす機会を持つべき子どもたちにとっても災いをもたらすものである。そして、真実から目を背けることは、核兵器により命を落とし、あるいは傷を負った人々にとっても災いである。被爆者の払った犠牲は、私たちに正面から真実を見つめることを要求している。

私はこの本が日本で刊行されることを光栄に思っている。翻訳と出版の手配をしてくれた長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）に対しては、深甚なる感謝を捧げたい。そして、この本の刊行が、核兵器に関する理解を深めるといふ重要な活動にいささかなりとも貢献できることを願っている。

日本は、ある意味で、核兵器の問題についての世界の良心である。おそらく日本には、核兵器に関する真実を直視し、核兵器に関する真実を伝える、特別な責任があるだろう。

2015年10月

ウォード・ウィルソン